外国語学習の達人に学ぶ

那須　雅子

１．はじめに

本発表では、第二言語・外国語を高度なレベルまで習得した「達人」に対して実施したインタビューの分析結果を紹介し、この成功例が示す教育的示唆について考察した。まずは、明治・大正期の英語達人の中から、新渡戸稲造と岡倉天心の学習履歴を紹介した。次に現代の外国語学習の達人・成功者が実践した学習履歴を、筆者が収集したインタビュー記録の中から、多読・多聴などの具体的な学習法の有効性に絞って論じた。また「グローバル人材」として活躍するためには外国語を用いて「話す力」と「書く力」は必須と考えられるが、このような発信力を身につけるために有効な学習法について、現代の「達人」の実体験を紹介し考察した。

2. 明治・大正期の達人たち

日本では開国直後から明治・大正期にかけて、驚くべき英語力を習得した「英語達人」が輩出されている。国際連盟事務局次長を務め『武士道』(*Bushido: The Soul of Japan*)の著者としても名高い新渡戸稲造（1862-1933）や、アーネスト・フェノロサとともに日本美術復興に尽力し、また『茶の本』(*The Book of Tea*)の著者である岡倉天心（1862-1913）などである。本発表では、彼らが実践したとされる英語習得の記録を、『英語達人塾』(斎藤：2003）を参考に分析し、彼らの学習実践の実態に迫った。特に「多読」すなわちオーセンティックな英語を大量に読んでいることに焦点をあて、過去の英語達人たちが実践されたとされる英語の読書の質と量に関して紹介した。

3. 質的研究の手法と目的

現代では、音響機器やマルチメディア機器が発達し、様々な新しい学習スタイルが実践されている。さらには、外国語のネーティブスピーカーと触れ合う機会が身近なものとなり、海外留学者も大幅に増加するなど外国語習得を取り巻く環境は大きく変化した。そこで現代の外国語学習の達人―すなわちターゲット言語習得の成功者―は、どのような学習法を行っているのかについて、インタビューを実施し、その内容の考察と分析より彼らの学習履歴を明らかにし、過去の日本の英語達人が行った学習法との相違点を考察した。特に学習成功者のインタビュー分析という質的研究としての利点を活かし、学校教育だけでなく個人的に実践した学習や海外経験なども含めて外国語学習成功者の全学習履歴を明らかにすることを目的とした。これは、複数の被験者を対象とするアンケート調査やクラスルームを対象にしたテストスコアの比較分析などの量的研究では必ずしも明らかにできない領域と考えられ、その点においても貴重な教育的示唆が得られる研究手法と考えられる。

4. 達人の定義とインタビューの実施

本研究においては、「達人」をどのように定義するかが重要な問題と考えられ、実際のところ「ネーティブスピーカーのようにその言語を話す」、「きれいな翻訳ができる」、「国際社会において不自由なく外国語を使用している」など様々な定義が考えられる。本研究においては、外国語達人を、(1）学習対象の外国語が日常的に話されていない地域で生まれていること（2）家庭環境において、その外国語の使用が日常ではないこと（3）その外国語の能力が「きわめて高い」と判断を下す材料があること、とした。インタビュー実施期間は平成 23 年 3 月～平成 25 年 12 月であり、対象者 32 人であった。その内訳は、日本人が 28 人でその他の国籍 4 人であった。日本人の内訳は、社会人 5 人・大学（院）生 18 人・高校生 1 人・中学生 4 人で、そのうち、海外滞在歴なしが 16 人、海外滞在歴のありが 12 人であり、海外滞在期間に関しては、1 年程度が 3 人、それ以上長期が 9 人であった。

5. 現代の「達人」の履歴紹介

インタビューの中から、本発表では、多読と多聴の取り組みが有効であったという実践例を紹介した。多読に関しては 4 人のインタビューを抜粋した。多読は、先人たちが実践したような文学教材や原文でない場合でもある程度有効であり、教材が何であれ大量に読む多読が有効であることを示す例を紹介した。そして、Graded Readers などの易しい教材も有効であり、大量に読むことが話すスキルの上達にもつながったという証言も紹介した。多聴が有効であったとするインタビュー内容も２例紹介し、大量に聴くと同時に、聞き流すのみではなく辞書を徹底的に用いることの重要性についても触れた。

6. 結び

最後に、本発表の要点を、質的研究の利点と問題点、現代の外国語学習における多読と多聴の有効性に絞ってまとめた。語学学習の成功者の具体的な学習履歴を提示した本研究が、現役の語学学習者への教育的示唆を少なからず含んでいることを強調した。

参考文献

斎藤兆史　（２００３）『英語達人塾』　中公新書.